

資料

時間次元における諸自己像の関連性と自我同一性レベル

杉 山 成¹RELATIONSHIP BETWEEN BOTH THE SELF-IMAGE ON THE TIME DIMENSIONS
AND THE EGO-IDENTITY LEVEL

Shigeru SUGIYAMA

The purpose of the present study was to examine the relationship among self-images in the past, the present and the future related to the ego-identity achievement level. Identity-confusion questionnaire (Sunada, 1979) and Self-Differential Scale (Nagashima et. al., 1967) were administered to 205 university students, in order to measure "the ego-identity achievement level" and "the images of past-self, present-self and future-self (ideal-self and predicted-self were measured as future-self)". Regression analysis was applied to the data between identity-confusion of High and Low group. The main findings were as follows: (1) The influence of past-self upon present-self was stronger in the identity-confusion Low group than in the High group; (2) The influences of past-self and present-self upon predicted-self was stronger in the identity-confusion Low group than in the High group; and (3) When the dependent variable was ideal-self, the multiple correlation coefficient was considerably low.

Key words : past-self, present-self, predicted-self, ideal-self, identity-confusion.

問 題

時間的展望 (time perspective) とは、その時、その時における個人の未来についての見方、経験、および過去についての見方の総体である (Lewin, 1951)。Lewin (1942) は、場の理論の中で時間的展望を生活空間を成り立たせている重要な一面として位置づけ、個人の生活空間が現在だけでなく、未来や過去をもその中に含んでいるとし、集団や個人の行動、及び適応に影響を与えるものと考えた。その後、時間的展望と社会階層やパーソナリティ指標との関連が多くの研究者によって検討されている。

時間的展望の研究対象には、「extension: 概念化された将来の時間的範囲の長さ」, 「density: 個人が未来に予想する出来事や、経験の数」などの認知的な側面

に属する概念や、「directionality: 現在の瞬間から未来へと移行する感覚」, 「personal time perspective: 現在と過去、現在と未来との間の主観的評価の差」といった情緒的な側面に属する概念が考えられる (都筑, 1982)。そして、その情緒的な側面の1つに時間的関連性、および時間的連続-不連続性の概念がある。

時間的関連性とは、過去、現在、未来がどの程度関連性をもってとらえられ、かつ統合されているか (Cottle, 1967) という概念であり、Cottle & Pleck (1969) は、この指標と顕現性不安、達成動機といった領域との関連性を確認している。

また、時間的連続性-不連続性という概念も時間的関連性とほぼ同じ内容を扱っていると考えることができる。少年鑑別所に入所している非行少年の時間的展望を検討した勝俣・篠原・村上 (1982) は、非行少年における時間の不連続性という特徴について言及し、非行少年は、過去、現在、未来を不連続なものとしてと

¹ 立教大学文学研究科 (Rikkyo University)

らえる傾向があるために、現実の行動と未来とを切り離して受けとめている可能性がある」と指摘している。杉山・神田(1991)も、対照群よりも非行少年の過去、現在、未来の評価の関連性が低いという傾向を確認している。

一方、自己の生涯発達の観点から Erikson (1959) は、青年期を「自我同一性対同一性拡散」の危機の時期とし、自己の連続性ないし一貫性、すなわち自分が歴史的にどのように育ってきたか、また、現在が自分の過去にしっかり根ざしていることに確信がもてるかどうかという感覚を自我同一性形成の重要な心理的要件としてとらえた。さらに、人生目標をはじめとする自己の「未来」は、この確信の上に立って、はっきりと具体性を持って現実的なものとなりうるとし、個人の自我同一性の達成が時間的関連性の認知を前提に成立することを示している。こうした見解からは、時間的関連性または時間的連続・不連続という概念が、特に青年期において、自我同一性と深い関わりを持つことが予想される。

都筑(1993)は、そうした時間的関連性と Marcia(1966)の自我同一性地位との関連性について検討した。時間的関連性の測定には、Cottle (1967) のサークル・テストが使用され、過去・現在・未来の3つの円の重なりのパターンがその指標とされた。4つの自我同一性地位を比較した結果、同一性達成地位と積極的モラトリアムにいる個人が、他の他位の個人よりも、より統合した形で3つの円を描くことが示され、自我同一性地位と時間的関連性との関連性が確認された。しかし、サークル・テストという手法は、その性質上、各時間次元の関連性に関するカテゴリーカルなデータ(3つの円が互いに接しているか/内包されているか/離れているか等)しか得られず、関連の大きさや Erikson の指摘するような関連の方向性については検討することができないという限界がある。

そこで、本研究では個人の時間次元における自己概念という観点から、個人の過去・現在・未来の時間次元の関連性の大きさや方向性について検討することを目的とする。

自己概念とは、自分自身についての意識や記憶、感情や価値づけ等々からなる構造的ゲシュタルトであり、その時々自己意識をその土台において支え、枠づけているもの(梶田, 1988)である。そこには主要な要素として、他者からみた自己像や、過去の自己像、自己の可能性や未来の自己像などといった多面的な数多くのイメージが含まれている。そして、それらのイメージ

が現実の自己像との間でダイナミックな相互関連を持つことで、新たな現実自己が形成されたり、新たな行動へのモチベーションが生じると考えられる。すでに述べたように、Erikson(1959)は、そうした自己像の関連性について、過去の自己と現在の自己の連続性を確信することが自我同一性の形成の重要な要因であり、それが達成されることによって未来に対する展望もまた具体性をもち現実的な存在になることを指摘している。この Erikson の見解からは、自我同一性のレベルが上昇するにつれて、現実の自己の形成において過去の自己像が重要になり、未来の自己像が過去や現在の自己のイメージに基づくものになっていくことが考えられる。よって以下の仮説を設定した。すなわち、「青年期における個人の現在の自己は過去の自己に規定され、一方、未来の自己は過去と現在の自己に規定されているであろう。そして、そうした諸自己像の関連の強さは自我同一性のレベルと関係があり、自我同一性が混乱している個人よりも、自我同一性確立のレベルの高い個人において諸自己像の関連性は強いであろう」というものである。本研究では自我同一性レベルの高・低群における過去・現在・未来における自己の認知像を測定してパス解析を行い、現在の自己に及ぼす過去の自己の影響、また未来の自己に及ぼす過去・現在の自己の影響をそれぞれ検討する。また、両群における諸自己像間の相関係数の検定を行うことによって、この青年期の自己の時間的関連性に関する仮説について検討する。

ところで、この時間次元における諸自己に関して考えた場合、「過去の自己像」、「現在の自己像」、「未来の自己像」の3つが想定される。「過去の自己像」は過去の自分がどんな人間だったかという自己認知を反映し、「現在の自己」は現在、自分をどんな人間と思っているかという自己認知を反映する。一方、「未来の自己」は個人にとって唯一未だ経験のない自己であり、それゆえ、その像は願望としての自己や、現実的な予想としての自己などの混在したものとなっていることが予想される。こうした「なりたい」という願望としての理想の自己と、現実の連続としての「こうなっているであろう」という予想の自己とは、同じ未来に属する自己でありながら性質、特に現実のレベルが異なるのではないかと考えられる。そこで、本研究では前者を「理想自己」、後者を「予想自己」としてとらえ、別々に測定を行うこととする。

方 法

被験者・調査手続

被験者は大学生205名（男性97名、女性108名）である。年齢は18才から23才であり、平均年齢は19.8才。1992年8月中の授業中に質問紙を配布し、90分の授業時間内にすべての項目について回答させた。

質問項目

(1) 諸自己像の測定およびそれらの配置

長島・藤原・原野・斉藤・堀（1967）のセルフ・ディファレンシャル尺度を応用し、過去・現在・理想・予想の自己像を測定した。形容詞対は12対で、長島ら（1967）の大学生で得られた6つの因子のそれぞれから、因子負荷量の大きいものを取り、7件法で評定させた。因子とその項目は以下のようなものである。向性（外向的な－内向的な、おしゃべりな－無口な）、情緒安定性（丸い一角のある、暖かい－冷たい）、強靱性（臆病な－勇敢な、弱々しい－たくましい）、誠実性（誠実な－不誠実な、まじめな－ふまじめな）、過敏性（敏感な－鈍感な、安定な－不安定な）、理知性（理性的な－感情的な、冷静な－情熱的な）。

手順としては、まず「過去の自己」「現在の自己」「理想の自己」というコンセプトを与え、それについて評定させた。その後、それらの存在する年齢の記述を求めた。このように「諸自己像の存在時期」を確認した上で、『さて、ここまで「理想の自己」についての特徴と、その人生上の位置について答えてもらいました。それでは、その「理想の自己」の時期に、あなたは実際にはどういう人間になっていると思いますか。その「予想の自己」についてお答えください』という教示を与え、予想の自己像についての評定をさせた。こうした手法をとったのは理想の自己とそれと同じ時期に存在する予想の自己との相違を被験者に明確に意識させる必要があったためである。

なお、被験者が調査者側の意図を読みとって意識的に評定を調整することを防ぐために、諸自己像の評定の際には、4枚のA4用紙に自己像の評定尺度を1つずつ配置し、さらに、自己像ごとに形容詞の順序と方向をランダムにした。

(2) 自我同一性レベルの測定

砂田（1979）の同一性混乱尺度を用いた。これは東大式パーソナリティ検査、YG、MMPI、Eriksonの著作を参考にして作られている。34項目で構成され、5つの下位概念（時間的展望混乱、自意識過剰、役割固着、労働麻痺、同一性混乱、両性的混乱、価値混乱）に分かれている。回答は3件法で、同一性混乱の方向を示している選択肢の反

応を2点、「どちらでもない」を1点、逆方向を0点として点数化を行った。

結 果

項目分析

まず、理想の自己と予想の自己を未来の自己と定義したので、それを「諸自己像の存在時期」の対比によって確認した。その結果、過去の自己の年齢は平均で約14.6才（標準偏差3.58）、現在の自己の年齢の平均は約19.8才（標準偏差1.53）、理想・予想自己の年齢の平均は約31.3才（標準偏差8.52）であった。各ケースごとに調べた結果、理想・予想自己の年齢が、現在の自己の年齢以下というケースが男性において2件だけあったので、その2ケースは以下の分析から除いた。よって、以下の分析は203名が対象になっている。

過去・現在・理想・予想における自己概念のセルフ・ディファレンシャル尺度は2項目ずつの6因子で構成されているので、その2項目ずつの相関係数を算出したところ、どの時間次元においても過敏性の因子においてのみ項目間の相関が1%水準で有意ではなく、他の因子に比して低いものであった。そこで以下では過敏性の因子に当たる項目を削除して分析を進めた。

同一性混乱尺度の各項目得点と当該の項目を除く合計得点との相関を算出した結果、1つの項目に関してはその相関が有意ではなかったため削除することにした。それ以外の33個の項目はすべて1%水準で有意な相関を持っていたため、この33項目の合計得点を同一性混乱の指標として採用することにする。全体の α 係数は0.79となり、一応の内的－一貫性が認められる。得点の平均は23.7で標準偏差は7.51。平均値の検定の結果、男女間に有意な差がみられ、女性の方が有意に高い傾向を示した（ $t=2.31$, $df=201$, $p<.05$ ）。

解析

同一性混乱尺度の分布は正規分布に近かった。そこで、メディアンにより、被験者全体を同一性混乱高群（ $n=97$ ）と低群（ $n=106$ ）に分割した。

過去・現在・理想・予想のセルフ・ディファレンシャル尺度については、長島ら（1967）の結果に従って、ポジティブな方向に点数が高くなるように各形容詞対の方向を並び変え、合計した。この合計得点は向性、情緒安定性、強靱性、誠実性、理知性という各側面における自己像の認知されたポジティブさの総和と考えられるので、本研究ではこの合計得点を各時間次元における自己像の指標とする。よって、この得点は一番ネガティブな自己像からポジティブな自己像まで、得点

のレンジは10点から70点となる。それぞれの自己像得点の平均点と標準偏差は、過去の自己像で42.0(標準偏差 6.22), 現在の自己像で44.0(標準偏差 5.66), 理想の自己像で52.1(標準偏差 6.30), 予想の自己像で47.0(標準偏差 6.45)であった。

そして、同一性混乱の2群それぞれに諸自己像得点を算出し、平均値の検定を行った(TABLE 1)。その結果、過去・現在・理想・予想すべての自己像得点において、同一性拡散低群は高群よりも有意に高い得点を示し、その差は過去と予想において5%水準(過去の自己: $t=2.42$, $df=201$, $p<.05$, 予想の自己: $t=2.41$, $df=201$, $p<.05$), 現在においては1%水準で有意なもの($t=2.73$, $df=201$, $p<.01$)であったが、理想の自己像においては、その差は有意ではなかった($n.s.$, $t=0.41$, $df=201$)。なお、同一性混乱2群間の諸自己像の因子別の平均値の検定の結果はTABLE 2のようになった。

TABLE 1 同一性混乱の高・低群による各自己像得点の平均値の検定

	同一性混乱		t(201)
	低群(n=106)	高群(n=97)	
過去の自己	43.0(6.00)	40.9(6.32)	2.42*
現在の自己	45.0(5.11)	42.9(6.05)	2.73**
理想の自己	52.2(6.11)	51.9(6.54)	0.41
予想の自己	48.0(6.66)	45.9(6.04)	2.41*

** $p<.01$ * $p<.05$ () 内は標準偏差

TABLE 2 同一性混乱の高・低群による因子ごとの各自己像得点の平均値の検定

		同一性混乱		t(201)
		低群(n=106)	高群(n=97)	
過去	向性	8.5(2.64)	8.0(2.62)	1.41
	情緒安定性	8.4(2.40)	8.4(2.33)	0.03
	強靱性	7.9(2.28)	7.1(2.32)	2.44*
	誠実性	10.3(2.32)	10.0(2.32)	0.98
現在	理知性	7.6(2.73)	7.2(2.71)	1.19
	向性	9.0(2.56)	8.7(2.37)	0.65
	情緒安定性	9.0(2.16)	9.1(2.05)	-0.30
	強靱性	8.3(2.13)	7.4(1.96)	3.15**
理想	誠実性	10.2(1.93)	9.9(2.04)	1.09
	理知性	8.3(2.54)	7.5(2.57)	2.19*
	向性	9.4(2.31)	8.8(2.17)	1.97
	情緒安定性	9.9(2.45)	9.9(1.97)	-0.13
予想	強靱性	9.8(2.19)	8.9(2.04)	3.33**
	誠実性	10.4(1.93)	10.2(2.15)	0.72
	理知性	8.3(2.45)	7.9(2.24)	1.13
理想	向性	10.3(1.89)	9.9(1.91)	1.26
	情緒安定性	10.9(2.34)	11.2(2.09)	-0.81
	強靱性	11.4(2.01)	11.3(2.15)	0.46
	誠実性	11.3(1.81)	11.2(2.05)	0.38
理想	理知性	8.1(2.84)	8.1(2.70)	0.11

** $p<.01$ * $p<.05$ () 内は標準偏差

次に、仮説検証のために時間次元における諸自己像間のパス解析を行い、さらに、説明変数と基準変数の間の単純相関係数を算出した。説明変数の選択は仮説に基づいた。したがって、現在の自己を基準変数としたときの説明変数は過去の自己であり、理想自己・予想自己を基準変数としたときの説明変数は過去の自己と現在の自己である。変数の投入は一括投入法で行った。TABLE 3は全体のデータにおけるパス解析の結果および説明変数・基準変数間の単純相関係数を示したものであり、TABLE 4-1は同一性混乱高群、TABLE 4-2は低群における同様の分析の結果である。全体および同一性混乱高・低群それぞれにおいて3回ずつの重回帰分析を行ったことになるが、その重相関係数はすべて有意なものであった。FIGURE 1-1はTABLE

TABLE 3 各自己像間の重回帰分析の結果(全体)

説明変数		基準変数					
		現在の自己		予想の自己		理想の自己	
		β	r	β	r	β	r
過去の自己	過去の自己	.45**	.47**	.25**	.45**	.06	.20**
	現在の自己	ψ	ψ	.45**	.56**	.32**	.34**
重相関係数		.45**		.60**		.34**	

** $p<.01$ * $p<.05$ β は標準偏回帰係数, r は単純相関係数

TABLE 4-1 各自己像間の重回帰分析の結果(同一性混乱高群)

説明変数		基準変数					
		現在の自己		予想の自己		理想の自己	
		β	r	β	r	β	r
過去の自己	過去の自己	.37**	.38**	.21*	.33**	-.10	.01
	現在の自己	ψ	ψ	.34**	.41**	.30**	.35**
重相関係数		.37**		.46**		.28**	

** $p<.01$ * $p<.05$ β は標準偏回帰係数, r は単純相関係数

TABLE 4-2 各自己像間の重回帰分析の結果(同一性混乱低群)

説明変数		基準変数					
		現在の自己		予想の自己		理想の自己	
		β	r	β	r	β	r
過去の自己	過去の自己	.50**	.54**	.24**	.52**	.22*	.38**
	現在の自己	ψ	ψ	.56**	.68**	.32**	.43**
重相関係数		.50**		.71**		.47**	

** $p<.01$ * $p<.05$, β は標準偏回帰係数, r は単純相関係数

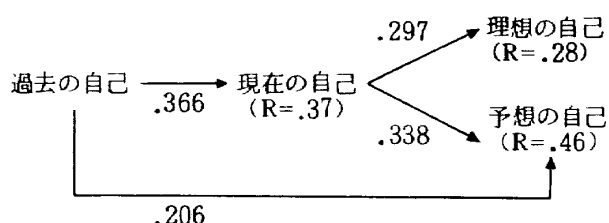


FIGURE 1-1 各自己像のパス・ダイアグラム(同一性混乱高群)
注) 矢印付近の数字は標準偏回帰係数を、()内の数字は重相関係数をあらわしている。5%水準で有意なパスのみ記した。

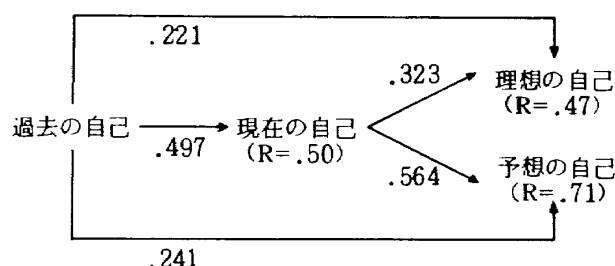


FIGURE 1-2 各自己像のパス・ダイアグラム(同一性混乱低群)
注) 矢印付近の数字は標準偏回帰係数を、()内の数字は重相関係数をあらわしている。5%水準で有意なパスのみ記した。

4-1, FIGURE 1-2 は TABLE 4-2 をもとにして作成したパス・ダイアグラムであり、パスは標準偏回帰係数が5%水準で有意になったものだけ表示している。

まず、全体のデータでは、ほぼ予想された結果が得られている。現在の自己は過去の自己から有意な影響を受けている。未来の2つの自己のうち、予想自己は過去と現在の自己の有意な影響を受けており、一方の理想自己は現在の自己からの有意な影響を受けているものの、過去の自己からの影響力は有意ではない。この未来の2つの自己における傾向の違いは、TABLE 1における両者の違いと同様に、その性質の違いを反映しているものと考えられる。この点について後に検討する。

次に、TABLE 4-1の同一性混乱高群とTABLE 4-2の低群を比較する。まず、現在の自己を基準変数とした分析では、ほぼ仮説を支持する結果が得られた。過去の自己が現在の自己を規定する標準偏回帰係数は両群において有意ではあるが、その値は同一性混乱低群において、より大きいものであった。

基準変数を予想自己とした分析においては、同一性混乱の2群の差が、より顕著に認められる。重相関係数では、同一性混乱高群のものが、約0.46であるのに対し、低群では約0.71とはるかに高かった。説明変数

間の関係をみると、両群において傾向は共通しており、現在の自己の方が過去の自己よりも予想自己に対して強い影響力を持っている。そして特に、同一性混乱低群における現在の自己の予想自己への影響力が強く(標準偏回帰係数で約0.56)、これは同一性混乱の程度が低い個人における、現在の自己の延長としての予想自己を認知する傾向の強さを示すものといえる。

最後に理想自己を基準変数とした分析でも仮説とほぼ一致した傾向がみられる。同一性混乱の低群の方が高群よりも重相関係数が高く、説明変数によって説明される割合が高い。説明変数の傾向としては、同一性混乱の低群においては、現在の自己のほかに過去の自己の標準偏回帰係数も有意であったが、高群においては、現在の自己の標準偏回帰係数のみが有意であった。

なお、同一性混乱の2群における諸自己像の関連性の大きさに統計的に有意な差があるか検討するために、独立した2標本における相関係数の差の検定法を当てはめ、諸自己像間の単純相関係数の差の検定を行ったところ、同一性混乱高・低群間に5%水準で有意差のあった単純相関係数は、過去の自己と理想自己、過去の自己と予想自己、現在の自己と予想自己との単純相関係数であった。一方、過去の自己と現在の自己、および現在の自己と理想自己との単純相関係数の両群の差は有意ではなかった。

考 察

過去・現在・予想・理想の自己像得点は、理想自己に関しては同一性混乱高・低群間に有意差がみられず、その他の自己に関してはすべて有意に同一性混乱低群の方が高かった(TABLE 1)。またTABLE 3のパス解析の結果においても、予想自己は現在・過去の自己から有意なパスを受けているのに対して、理想自己においては過去の自己からのパスが有意ではなかった。重相関係数においても、理想の自己の重相関係数は、予想自己のそれに比してかなり低い。

予想自己は、すでに記したように過去、現在の自己の延長と定義されるものであり、一方の理想の自己は「こうなりたい」という自分に対する願望である。諸自己像の相関関係はこれらの性質を反映したものと考えられる。これらの結果からは一般的に、過去の自己、現在の自己、および予想自己は、個人の生活空間のなかで強い関連性を持った1本の時間軸上の自己像群として存在しているのに対して、理想自己はそうした直線とは比較的関連の弱い、独立した存在であることが考えられる。

同一性混乱の程度によって分類した2群におけるパス解析においては、未来の自己のうち、予想自己において仮説を支持する結果が得られた。過去の自己と現在の自己が予想の自己に及ぼす影響力は、同一性混乱低群の方が大きいものであり、現在の自己と予想自己との単純相関係数には同一性混乱高・低群間において5%水準で有意な差があった。一方、未来の自己のうち1つの側面である理想自己は、同一性混乱低群の方が過去・現在の自己から受ける影響力は高いものの、予想自己を基準変数としたときと比較すると、その重相関係数はかなり低いものであった。また、現在の自己と理想自己との単純相関係数について同一性混乱の高・低群間に有意な差はみられなかった。これらのことから、Erikson (1959) の指摘するような、自己の「未来」の概念に対応するのは、理想の自己ではなく、個人が未来に予想する自己であると考えられる。

Lewin (1942) は、時間的展望の発達の一つの側面として、現実と非現実の分化という現象をあげており、個人が成熟して自己統制ができるようになることで、個人の生活空間が現実の水準と空想や夢といった非現実の水準に分化するとしている。その視点からみれば、予想の自己は現実の自分の延長、すなわち「未来における現実」であり、一方の理想の自己は「未来における理想」である。本研究の結果からは、未来展望における理想と現実の分化が、自我同一性のレベルによって異なり、同一性混乱の高群は、予想と理想の未分化な未来の自己を想定していることが示唆される。

一方、過去の自己の現在の自己への影響力は、標準偏回帰係数の数値で見ると限りにおいては同一性混乱低群の方が高群よりも大きいことが確認されたものの、単純相関係数の差の検定を行った結果では、両群の差は有意には至らなかった。この結果は、現在の自己と過去の自己の関連性は自我同一性確立のレベルの高い個人において強い、と考えた本研究の仮説とは一致しない。

その原因のひとつとして、Erikson の指摘にあるような現在に強い影響力を持つ「過去」と、本研究において指標とした「過去の自己の認知像」との間に概念的な不一致があった可能性が考えられる。たとえば、伊藤 (1991) は、自己受容の2次元性について検討し、自己受容には評価の次元のほかに、もっと感覚的な好一嫌の次元があることを指摘している。自我同一性の前提条件となるような過去に対する態度というものは、評価というよりも、過去の自己に対する感覚的な側面であるのかもしれない。今後、この過去への態度とい

う問題は自己受容という観点からの再検討の必要がある。

また、このことに関連して、現在の自我を支えている諸条件の変化によって過去の自己像が変容する (水口, 1982) ことも考えられる。このことから、自我同一性の確立が、現在に影響を及ぼしうるように過去の自己認知の変容を導く機能を持つということも予想されるであろう。そうした自己像変容のプロセスについての検討は今後の課題である。

引用文献

- Cottle, T.J. 1967 The circle test : an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 31, 58—71.
- Cottle, T.J., & Pleck, J.H. 1969 Linear estimations of temporal extension : the effect of age, sex, and social class. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 33, 81—93.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. International University Press. (小此木啓吾訳編 1973 「自我同一性」 誠信書房)
- 伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的变化 — 2次元から見た自己受容発達プロセス — 発達心理学研究, 2, 70—77.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 (第2版) 東京大学出版会
- 勝俣映史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望 熊本大学教育学部紀要, 31, 267—277.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale*. New York : Houghton Mifflin. (末永俊郎訳 1954 時間的展望とモラル 「社会的葛藤の解決」 東京創元社)
- Lewin, K. 1951 *Field theory and social science*. New York : Harper. (猪股佐登留訳「社会科学における場の理論」 誠信書房)
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551—558.
- 水口禮治 1984 人格構造の認知心理学的研究 風間書房.
- 長島貞夫・藤原嘉悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀 洋道 1966 自我と適応の関係についての研究(1) —セルフ・ディファレンシャル作成の試み— 東

- 京教育大学教育学部紀要, **12**, 85—106.
- 長島貞夫・藤原嘉悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀 洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2) —セルフ・ディファレンシャル作成の試み— 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59—67.
- 杉山 成・神田信彦 1991 時間的展望に関する研究 (1) —非行少年の時間的展望について— 立教大学心理学科研究年報, **34**, 63—69.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, **27**, 215—220.

- 都筑 学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, **30**, 73—86.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40—48.

謝 辞

論文作成にあたり, ご指導いただいた立教大学 水口禮治先生, 白梅学園短期大学 神田信彦先生に深謝いたします。

(1994.3.1受稿, 3.19受理)